

客家土楼における子どもの養育環境に関する研究

劉, 秀鳳

<https://doi.org/10.15017/1785453>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 劉秀鳳

論 文 名 : 客家土楼における子どもの養育環境に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、中国福建省西部にある伝統的な集合住宅-客家土楼における子どもの養育環境のあり方を明らかにし、エスノグラフィー及び生態学的心理学の観点からの研究を通して、現代都市部の集合住宅における子どもの養育環境の困難さという問題への解決方法に示唆を与える考察を試みるものである。論文全体は、研究対象と研究方法の観点から、第1部(第1章と第2章)と第2部(第3章、第4章と第5章)に分けて、問題意識及び理論基礎である序論と本論文内容の総括である結論を合わせて4つの部分により構成した。

序論では、客家土楼における子どもの養育環境を研究する問題意識及び本研究の目的、意義などを概観した。既往研究と新たな暮らしの動きから現代都市部の集合住宅における子どもの養育環境の困難さを確認した。現代都市部の集合住宅の養育環境の困難さを体験してきた筆者自身の問題意識から、現代の養育環境の解決方法への知見として客家土楼の研究をはじめた。客家土楼と現代の集合住宅は人々が集まって住むという人間環境の面が共通していることから、日常生活と環境との関係性という人間-環境の研究方法を取るという問題視点と研究方法を採用することによって、客家土楼の研究から現代の集合住宅における養育環境問題に示唆を与え得るという作業仮説を立てた。その際に、子どもを取り巻く環境や養育環境などの既往研究を踏まえて、関係論的な視点から統合的な養育環境概念を提案した。本研究で論じる子どもの養育環境は、子どもや環境を別々に見るのではなく、養育する大人と養育される子どもを一組のセットとして考え、養育環境とは養育する時に用いられる「状況」全般を指すものとして定義した。従来、客家土楼における子どもや子どもの生活を対象とした研究や、現代都市部の集合住宅における養育環境の困難さという問題への解決方法を探る際に伝統的な集合住宅を対象とした研究は行われておらず、本研究の試みには意義があると考えられた。

第1部では、客家人の歴史、養育文化と客家土楼の形成の歴史の過程及び都市化と観光化による客家土楼建築や居住の現状について検討を行い、客家土楼の子どもを取り巻く社会的・文化的環境を文献及び現地調査に基づいて考察した。第1部は第1章と第2章によって構成された。

第1章「客家人と客家土楼」では、客家の形成と歴史的変遷の分析から客家土楼の成立までの経緯や背景などを考察した。先行資料から、客家人の集住意識は客家の複雑な歴史的背景と山間の生活環境と関連していることと、土楼の形成と集住形態は独自の歴史背景と当時の集団間の関係を含む地域事情と関連していることを明らかにした。また、客家地域の現地調査から、客家人は一族の後継ぎである子どもを大事にし、子どもを熱心に教育する養育文化があることを確認できた。子どもが置かれている居住環境である客家土楼は、居住という一つの役割ではなく、客家文化や当地の歴史的背景を伝える役割もあり、子どもを取り巻く文化的、歴史的な環境にもなっていることを知ることができた。

第2章「客家土楼の現状」では、客家土楼の住民の生活の現状を、客土楼が中心的に分布している福建省龍岩市永定県と漳州市南靖県を中心に実施した調査に基づいて明らかにした。中国の急激な都市化に置かれている客家土楼地域の変化と土楼の世界遺産登録による観光化現象という2つの要因に絞って、客家土楼の居住環境と住民たちの生活の現状と変容について考察を行った。現地調査から、客家土楼地域では、住民たちは伝統的な居住様式を保持しながら、都市化と観光化による様々な影響を受けつつあり、都市部へ流出した人々が土楼へ戻る「逆流」現象という人々の動きを見ることができた。また、子育て世代や高齢者たちが土楼へ戻る動きや土楼の現代的な改造や改修により継続的な居住を実現している現状から、客家土楼は未だに生きている居住環境として住まわれていることが示された。

第2部では、生態学的心理学的アプローチに基づいて、日常生活行動場面という新たな単位を用いて客家土楼における住民の日常生活を観察した。人間と環境との関係性という生態学的心理学的観点で客家土楼における子どもを取り巻く人間関係環境及び物的・空間環境の実態を考察した。第2部は第3章、第4章と第5章によって構成された。

第3章「河坑土楼群における日常生活行動場面の調査」では、生態学的心理学的アプローチを採用した理由及び新たな分析単位である日常生活行動場面の調査方法の詳細についての検討を行い、多数の客家土楼地域から河坑土楼群を本研究の観察対象地と選定した理由を記述した。本研究で明らかにしようとした大人と子どもという人間と彼らを取り巻く環境との関係は、従来のインタビューやアンケートなどの方法で解けない領域であるため、生態学的アプローチを用いて、人々の行動を観察する Barker ら (1968) の生態学的心理学的視点を採用した。環境とセットにして行動を見るという Barker の理論の基本線を維持しながら、持続的な日常生活行動と場所のセット（組み合わせ）を「日常生活行動場面」として定義し、その調査の詳細について検討を行った。このような概念と方法論を用いて、生態学的心理学的アプローチを本研究の研究方法として提起した。

第4章「客家土楼の居住様式」では、客家土楼の空間構造と日常生活の関係性から客家土楼の居住様式を明らかにすることを試みた。客家土楼では、「閉鎖」的空間と「開放」的空間という空間構造の特徴や、住民たちの日常生活の「開放性」及び同族集住感覚などの土楼空間と住民たちの日常生活について観察を行った。黒川 (1983/2006) の中間領域論に基づき、多数の中間的空間の存在と空間の利用のしかたの多様性、曖昧性の特性を持つ客家土楼の生態学的心理学的構造を、「中間的領域」と呼ぶことによって客家土楼の空間構造と日常生活の関係性についての考察を集約した。

第5章「日常生活行動場面から見た客家土楼の住環境」では、福建省南靖県河坑土楼群を対象として客家土楼の空間構造と日常生活行動場面に注目し、客家土楼の子どもの住環境のあり方を明らかにした。子どもと大人住民の日常生活行動場面の観察を通して、子どもと大人が同時に空間を共有するという新たな知見を得て、客家土楼における子どもの住環境の生態学心理学的モデルを提出した。

結論では、第1部と第2部の研究結果を総括的にまとめ、序論で提起した研究の目的、課題に対して総合的な考察を行った。客家土楼をめぐる背景と住民たちの日常生活行動場面から、客家土楼における子どもの養育環境を、社会・文化的環境、人間関係環境と物的・空間環境として総合的に考察をした。客家土楼の研究から現代都市部の集合住宅の養育環境の困難さに対して、どのような解決方法が示唆として与えられるかを検討した。子どもの養育環境という視点で客家土楼の研究から導かれる現代都市部集合住宅への示唆として「子どもと大人が同時に共有できる中間的領域を設ける」という原理に集約される見解を得た。また、現代都市部集合住宅を建築、また改築する時に考慮されるべき基本的な要素を整理して、具体的な指針の提出を試みた。最後に本研究のオリジナリティと今後の課題を述べた。